

中国とその周辺におけるラック

杳名弘美
ginka@me.com

ラックとの出会い

東洋絵画の古典的な色彩の再現には、「綿臙脂」の復活が不可欠である。綿臙脂の主要な原料が紫鉱、すなわち、スティックラックであった。

エンジ色と綿臙脂

エンジという言葉は、中国語にとっても外来語である。語源はテュルク語系の言葉と推定でき、もとは、顔にさす紅色の化粧品（ルージュ）を意味する言葉であった。古代では、ルージュはベニバナが原料であった。晋～初唐にかけて、ラックを原料とするルージュ、綿臙脂が漢民族の域内でも作られるようになった。綿臙脂は、ベニバナのオペラピンク～真紅の階調を発色のモデルにして、発展、拡散していったと筆者は推測している。

中国の古籍の中のラック

最古の記載は、張勃の『呉録』（晋）（散佚）（4世紀頃）にある、「蟻絮漆」が最古の例だと思われる。小さな虫が密集して、綿毛のような白い物質を分泌して、漆のように固まっている状態を的確に表している。中国のラックおよび綿臙脂の歴史については、下記の論文がその内容を網羅して書かれている。王进玉先生は、敦煌研究院の研究者である。

■ 王进玉《中国古代对紫矿的开发应用》、《中国科技史料》第21卷第3期(2000年),222-227.

平賀源内とラック

平賀源内『物類品隲』にみる、江戸の人々が目にしたラック。『本草綱目』から引用しつつ、平賀源内が見聞したラックに関する知識も加えて書かれている。『物類品隲』は宝暦13年（1763年）刊行。江戸で行われた5回の薬品会に出品された2000点以上の中から、重要なものや珍しいものを厳選して収録。

※薬品会：当初は、医者や本草学者による薬品等を持ち寄った研究会だったが、次第に博覧展覧会のようなイベントとなる。『物類品隲』のもとになった源内が関わった5回の薬品会は、1757～1762年に開催。

『物類品隲』卷三 蟲部 紫鉱 （杳名訳）

紫鉱 『本草綱目』にいわく、紫鉱は南番に産出するという。アリやシラミのような細かい虫が、木の枝の縁にこれを造る。それは、まさに今の冬青樹の上に小さい虫が白蠟を造るのと似ている。ゆえに多くが枝を挿してこれを造っている。（養殖している？他の訳では虫が枝を挿して？いることになっているものがある。要検証。この部分は『本草綱目』を引用している）

今、呉人（呉は杭州近隣）は、これを用いて胭脂を作っている。日本では産出しない。

蛮産の紅毛人がもたらす紫鉱は、黒紫色をしている。これで綿を染めた物を綿胭脂といい、別名を胡胭脂という。和名はシヤウエンジ。

※『物類品隲』では、著者は平賀国倫と表記されている。源内は通称。諱は国倫。

※東壁は、『本草綱目』の作者の李時珍の字。

※現代では、冬青は中国語でモチノキ科の木、日本語でモチノキ科モチノキ属のソゴゴを指すが、イボタロウがつくイボタノキは、モクセイ科イボタノキ属である。

杭州の綿臙脂

雙料杭脂（小山畫譜, 17C）、杭州雀舌（繪事瑣言, 1797）などにみられるように、古くから、杭州で良い綿臙脂を産することが知られている。

『杭州府志』（1888年第一次編纂, 1922年鉛印本）には、杭州にある織物、錫箔、胭脂、紡績等の作坊は、南宋の宮廷の需要から興ったとある。『夢梁錄』（南宋末：1274年）には、修義坊北に古老胭脂鋪、官巷北に紅

染王家の胭脂舗があったとされている。孫源茂のある油局橋は、両者の中間に位置する。

明清にわたり良質な綿臙脂を製造していた杭州には、南宋の流れをうけた臙脂の工房が存在していたことは、確実であると思われる。孫源茂の綿臙脂からラックが検出されたことも、それを裏付けている。

アヘン戦争前夜の紫禁城のラック

清朝の内務府档案（とうあん）には、紫鉉や綿臙脂に関する記述が数多く見られる。

档案は、行政文書、公文書の意。清朝にかかわる膨大な档案は、北京の中国第一歴史档案馆（紫禁城内）、台湾の国立故宫博物院等に分散して保管されている。筆者は2012年7月、中国第一歴史档案馆にて、内務府造辨處にかかわる資料の調査と複写を行った。

◎アヘン戦争前夜のあるラックの記録。（道光3年(1823年)）

道光三年八月初七日

廣儲司 奏為暹羅国恭進貢物呈覽事

……紫梗交造辨處……晚膳後造辨處奏紫梗係紫草茸内薬房

（沓名訳） ……紫梗は造辨處へ下げ渡す。

……晚膳の後、造辨處は奏上して、紫梗を紫草茸と改め、内薬房へ移送した。

※内務府は清朝の宮廷事務を行う機関。

※廣儲司は、内務府の各倉庫の管理と出入の事務を司る部署。

※暹羅国はシャム、すなわち現在のタイ。清朝に南方の物産を貢物として贈る。

※造辨處(造弁処)は、康熙帝の治世に創設された。宮廷で用いられる器物や贈答用の美術品を制作する部署。皇族や文官により、芸術家や職人は厳格に管理され、膨大で綿密な書類が遺されている。

※内薬房は、皇帝、皇族のための医師が所属し、処方を行う部署。薬材の収蔵、管理も行われる。

■道光帝(宣宗)の時代：アヘンの清朝への流入により、風紀と経済が混乱しはじめる。道光22年(1840年)にアヘン戦争勃発。アヘン戦争後の南京条約(1842年)により、開港が強制され、貿易が完全に自由化され、欧米の化学染料が、香港や広東を通して、中国大陸へ浸透していく。

2009年の雲南省ラック調査

文献調査、雲南省内での生産量の推移を検討し、実地調査のルートを検討した。工業の原料としてラックが生産される前からの産地であり、報告が多くない思茅・西双版纳地区への実地調査を2009年9月21~29日にかけて行った。

実際にラックを木から採取し、また採取している人から話を聞く事ができたのは、通関の山奥の普洱市墨江県哈尼族自治縣魚塘彝族郷から、さらに山分け入った竜潭郷の奥の丫口付近の森の中の一軒家である。景洪市勐旺郷瑶家村では、ラックを薬や接着剤として使用している瑶族の人々、また勐旺郷でもラックを自家用に保存する基諾族の方に話を聞く事ができた。

しかし、多くの場所では、かつて自然のラックカイガラムシのいた森がゴムのプランテーションになっているなど、生産の撤退が見られた。また、山間部の部族の人々を平地に移住させる政策のため、山と人々との距離が生まれ、かつてのように、天然のラックを山から入手し、生活の資材として用いることが難しい状況になっていた。染織に用いられている例も調査範囲では出会えなかった。

2012年の中国薬材市場調査

中国には、各地方に大きな漢方薬市場がある(安徽亳州市药材市場、广东广州市清平路药材市場、广西玉林市火车站药材市場、河北安国市祁州药材市場、江西樟州市药材市場、河南辉县百泉药材市場、四川成都市荷花池药材市場、陕西西安市万寿路药材市場、湖南邵东县廉桥药材市場、东普宁市药材市場、重庆市解放路药材市場、甘肃兰州市黄河药材市場、云南昆明市菊花园药材市場、山东鄆城县舜王城药材市場、湖北蕪春县蕪州药材市場、湖南岳阳市花板桥药材市場、黑龙江哈尔滨市三棵树药材市場)。

安徽省亳州市の薬材市場が最大であり、中国全土だけでなく、周辺地域の様々な薬材を入手することが可能。

付録：中国の統計によるラック生産の概況。

